

入選

中学生の私にもできること

神奈川県 渋沢中学校 2年 市野 凜音

たなばたの頃の西日本豪雨の被害は、夏休みに入ってもまだおさまっていませんでした。それどころか、家が大雨で流されてしまって、帰る家もなく、地域の体育館などで避難生活をおくっている人たちが大勢いるのです。

自分の家が水につかってしまうなんて、私には想像できません。大事な思い出の写真、生活に必要な物、ランドセルなどの学校の物もすべてなくなってしまったのです。つらくて心が苦しくなりました。

被災地のボランティア活動をニュースで見ると、いてもたってもいられない気持ちになったり、中学生の自分にはできないなという後ろ向きな感情が交じったりして、もやもやした気持ちになりました。

そんなときに、偶然SNSで手作り品のチャリティがあるということを知りました。私の母は洋服を作る仕事をしているのですが、日本中の手作り作家さんたちとつながっていて情報を交換しているのです。小学校用の布子物がまったく足りていないので、みんなで作って送ろうという内容です。

すぐにお母さんもチャリティに参加しました。私も何かお手伝いしたいなと思いました。でも何ができるか自分でもわからないし、私は何か踏み出すとき、ちょっとしりごみしてしまうところがあるのです。

勢いよくミシンを踏んでいるお母さんの後ろでもじもじしていると、お母さんが振り返って強い感じで言いました。

「凜音も作る？」

「うん。やってみるよ。作りたいよ！」と私はすぐ言い返しました。

チャリティで作る物は、絵本バッグ、体操袋、巾着、上ばき入れなど、学校に通うときにとてもよく使う物ばかりです。

私は小学生のとき、家庭科の授業で巾着を作ったことがあったので、巾着作りをしました。ミシンを踏んでいると、ものすごく暑くて汗もどんどんタラダラ出てきます。でも被災地の人たちはクーラーのない体育館で毎日過ごしているんだ、外で土砂をどける作業をしている人も大勢いるんだと、その大変さを思ったら、弱いこと言っていられないと思い、私は作り続けました。

そして母と私で合計30点くらいの手作り品を被災地へ送りました。何か手伝いたい、ボランティアしたいという気持ちはあっても、中学生だしそんな遠くにも行けないなとか、無理だよ、できないよと思っていました。

でも今回のチャリティを経験して、遠くにいたって、中学生の私にだってできることがあるんだということを知ることができました。私の作った巾着を、知らない小学生が気に入って使ってくれたなら、本当にうれしいです。

少しでも気持ちが楽しくなって、当たり前なのいつもの生活が早く戻りますように。